

日本の伝統・文化を継承する若者たち

明日への扉

Door to Tomorrow



Munehiro Shibata

1984年、戦国時代から京弓の製法を代々受け継ぐ、宮内庁御用達の「柴田勘十郎弓店」の長男として生まれる。23歳で二十一代目の父に入門以来、京都市内の工房で研鑽を積む。



京弓(きょうゆみ)

天文3年(1534年)に初代・柴田勘十郎によってつくられたのが始まりとされる。見た目にも美しい京弓は、しなやかでありながら力強い引き味と鋭い牙えを併せ持ち、現在も多く愛好家に支持されている。

日本の伝統・文化を継承する若者たちを紹介する映像ドキュメンタリー「明日への扉」をぜひご覧ください。

MOVIE WebやTVなどでお楽しみいただけます。

Web版 パソコンやタブレットでもご覧になれます。本紙掲載以外に、多数の若者たちをご紹介します。

アットホーム明日への扉 検索



TV番組 ディスカバリーチャンネル(CS) 冠番組 「アットホーム presents 明日への扉」放映中 毎週金曜日 22:53~23:00

ビジョン ANA国際線「SKY CHANNEL」にて放映中

NEW!! 最新号のご案内 好評公開中

No.060 / 甲州水晶貴石細工職人 藤森 信行 氏

弓 師

柴田 宗博 氏

戦国時代から続く、技と名の継承に全力を注ぐ。

遙か昔の縄文時代に、狩猟道具として生まれた弓。以来、神聖な儀式における宝物、あるいは武器として受け継がれ、今日では心技体を鍛えるための弓道に用いられている。

全長七尺三寸(約22.1cm)と世界最大の日本の弓は和弓といい、その一つが京都発祥の「京弓」。柴田宗博さんは、京弓づくりの元祖であり、戦国時代からの歴史を持つ「柴田勘十郎弓店」で技を磨く若き弓師だ。

きつかけは？

柴田「幼いころから父である二十一代目・柴田勘十郎をまねて竹を削ったりしていました。弟子入りして実感したのは、「この技をものにするには時間がかかる」ということ。弓づくりは想像以上に奥が深いんです」

弓は竹のみではなく、幾つもの素材

が組み合わさってできる。竹やハゼノキなどを組み合わせて芯をつくり、真竹で挟むのだが、厚さ1mmの違いで引く力が5kgも変わるため、厚みの調整には細心の注意が必要となる。

最も技量が問われるのは、弓をイメージした形に反らせる「弓打ち」。弓は主に五つの曲線で構成され、それぞれの反発力をいかに釣り合わせるかで、その性能が決まるためだ。

柴田さんは麻縄を巻きつけ、竹のくさびを打ち込みながら、真つすくな弓を反らせていく。その数は1000を超えるが、費やせる時間はわずか15分ほど。くさびの場所や打つ強さを瞬時に決め、「龍」と格闘するかのよう。自分の背丈を超す弓に五つの曲線を描く。しかし、これは最終の形ではない。大きな反発力を得るために、弦を掛ける際、弓を逆方向に反り返らせる必要がある。つまり、逆向きにして弓の形となるよう、五つの曲線を描いていたのだ。

今の気持ちは？

柴田「経験を重ねるうちに、分からなかったことがだんだん分かってくる感じがする。とは言え、まだ師匠の力を借りることがあるので、これからも日々精進です」

500年近く守られてきた「柴田勘十郎」の魂をつなぐため、若き弓師は矢のように突き進む。明日への扉を開け、また一歩、夢に近づく。

※2011年6月取材。掲載内容は取材当時のものです。

MOVIE MORE!! 伝統を守る重圧と戦いながら、技の修得に励む姿を動画で詳しくご紹介しています。ぜひご覧ください。